

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷五十五第

月八年七十和昭

論叢

全體主義的經濟論理……………經濟學博士 柴田敬

戰時船舶全面的徵發への行程……………經濟學士 佐波宣平

強制カルテルについて……………經濟學士 靜田均

時論

世界的論理の轉換者日本……………經濟學博士 石川興二

研究

マルサス『人口論』の人間觀的基礎……………經濟學士 白杉庄一郎

二つの型の現金殘高……………經濟學士 一谷藤一郎

フランス植民帝國の問題……………經濟學士 河野健二

說苑

近世絹織業の分析視角……………經濟學士 堀江英一

附錄

彙報

時

論

世界的論理の轉換者日本

石川 興 二

今や人類が歴史はじまつて以來の最も激しい慘禍の中に置かれ居ることは何人と雖もこれを否定することが出來ないであらう。昭和十五年日獨伊同盟に當り畏くも「今や世局ハ其ノ騷亂底止スル所ヲ知ラス人類ノ蒙ルヘキ禍患亦將ニ測ルヘカラサルモノアラントス」と仰せられたところのものは其後愈々深い世界の事實となりつゝある。今や展開しつゝある第二次歐洲大戰の慘禍は二十年前の第一次歐洲大戰の慘禍に對して比較すべくもない大きなものとなつた。近世を通じて著しき發展を果げたる經濟的生産力並に發明發見の一切は殆んど總て人類の争鬪の爲めに用ひられて居る。本來人類を生かすべく齎らされたるそれ等のものは、今や人を殺す爲めに用ひられて居るのである。かく一切を擧げて鬪争に傾注せざるを得ない現代にあつてはその反面に於て、人間の生活はその經濟生活に於てのみならず一切の文化域に於て次第に困窮化されざるを得ないのである。嘗ては戦争は文化の母とも云はれたが、資本主義的生産の發達を前提としてその消耗力が莫大となつた現代の戦争は人間の文化をも壓倒し盡さんとするのである。現に第一次歐洲大戰以來兵器は著しく發達したが、他の文化は殆んど停止した

姿であつた。若し今後戦争が繰返へされるとするならば、戦争の慘禍は愈々深刻化し人類の生活は愈々困窮化せざるを得ない。加之今日の戦争は尙ほ鐵と火薬とを以てする勇壯なるものであるが、この陽性的な戦争は次第に陰性化せざるを得ないであらう。鐵と火薬とを以てしては敵し得ざるものは、微菌を以て毒物を以て敵に對處せざるを得ない。それは第一線に於てのみならず、航空機によつてこれを銃後の國民に對しても用ひまた更に田園に對し牧畜に對してこれを用ひ以て國民の食糧を破壊し國民を饑餓に陥れんとするに至るのである。かくして一度戦争が陰性化しはじめるならば、彼我の相關々係によつてこれが愈々深刻化せざるを得ない。かくては、人類はその自滅に向つて急速に進み行くより外ないのである。これは「人類ノ福祉ト萬邦ノ協和トニ寄與スルアラソコトヲ期セヨ」と仰せられた大御心の正に反對の方向であることを、日本人たるものは深く心しなければならぬ。

人類をかくの如き慘禍より救はんとするならば、先づその原因に深く思を致さなければならぬ。戦争は國家間の關係より起ると考へられる。従つてこの關係を正せば戦争は止むとも考へられるのである。然しこの關係を正すと云ふことは何を意味するであらうか。第一次歐洲大戰後國家間の關係は正されたとも考へられたであらう。而もその後二十年にして今や第二次歐洲大戰はそれよりも更に慘禍の激しいものとして勃發したのである。第一次歐洲大戰後戦争を抑壓する爲めに工夫されたるベルサイユ條約も國際聯盟も委任統治も何等戦争を防止するには役立たなかつたのである。而して第一次大戰後は來るべき戦争への準備期として各國は武備の充實にその全力を傾倒せざるを得なかつたのであつて、従つて前述せし如く、戦後に於ける新文化なるものは何等見られなかつた。然らば戦争の原因は一層深いところにあると云はなければならぬ。戦争の慘禍を防止すると云ふこと

1) 英國等がかくの如き方法を今次の大戦に於て既に濶逸に對して用ひたことは新聞紙上に現れてゐる。

はこの原因を求めこの原因自體を止揚することではなければならない。

然らばその原因は何であらうか。それは實在自體の構造に存するのであるが、更に深く實在を形成して居る論理自體に求められなければならない。

世界史は人間によつて作られた出來事の世界である。各時代の實在も人間によつて作られたものである。故にその形成原理の相違によつて實在の時代的區別がなされる。古代の實在、中世の實在、近世の實在には、各々それ自身の形成原理が働いて居る。これ等の時代の文化は總てその時代の形成原理より作られて居るものである。人牛觀も世界觀も政治、經濟等の制度も同様である。故にそこに總ての領域を貫徹する時代の一樣性が見られるのである。この各時代の形成原理がその時代の論理である。

古代の實在を形成して居たところのものは、鎖されたる「いへ」の論理であつた。この論理によつて形成される實在に於ては、血族的な結びを基礎としてその全體と個々人とが内面的に統一されて居た。それは先づ原始共同體として更に氏族團體として見られるのである。それは閉鎖的排他的なものであるが故に、その間に戦争が見られたのである。我國に於ける源平兩氏の争もこれである。中世の實在を形成したところのものは全體的一の論理であつた。故にそこに於ては、全體的權力を把持するところの者が一方的に支配して個々人はこれへの從屬的なものとして現れて居るのである。かゝる全體主義的實在はその全一的支配を擴大せんとするものであるが故に他の全體主義的實在との間に戦争が生ずることとなる。更に近世の實在を形成したものは個物的多の論理であつた。故にこゝに於ては個々人が主體となつて全體はその集合として考へられる。この論理によつて世界ははじめて一體に結ばつたのであるが、自然の乏しい西歐諸國は各々個人主義的主體として行動して弱き國々を榨取しまた

1) 西田哲學に於ては全體的一と個物的多との矛盾的自己同一の論理によつて實在の構造が説かれて居る。(西田幾多郎著哲學論文集)

この搾取的な利益を相互に争奪した。かくて第一次歐洲大戰も起つた。この後根本的な動搖に陥りたるこの個的多の論理が働いてゐる個人主義社會へ、全體的一の論理によつて働く權力者の統制が加へられたのである。これが現代の統制主義の實在である。それは一つの論理によつて形成されて居るものではなく、そこには二つの論理が對立して居り従つて最も不安動搖的な實在である。故にそこに於ては戦争が常態となる。而して今やそこには全體主義國家と個人主義國家とが戦ひつゝある。これが第二次歐洲大戰である。要するに現代の混亂は、國の内外に於て見られるこの個的多の論理と全體的一の論理との對立より起るのである。

かくして世界を形成して居る論理が、實在の一部分を主體とするところの部分的な主體性の論理である限り、世界が幾轉回するも主體と主體との鬭争は繰り返へされざるを得ない。而も争の慘禍はその度に激化し行くのである。而して人生の一切は戦争の爲めの手段とならざるを得ない。今や經濟も人生の爲めの經濟ではなく戦争の爲めの經濟である。それ故人類世界に恒久平和を齎らさんが爲めには、先づ第一に眞に具體的な主體性なる世界的論理への轉換がなされなければならない。それは部分的な主體性の論理より具體的な主體性の論理への轉換でなければならない。即ちこの新たな論理に於ける主體は鎖された「いへ」でもなく個的多に對立する全體的一でもまた全體的一に對立する個的多でもない。それは全體的一と個的多との對立を内面的に統一するところの大家オピニオン・リーダーである。この大家を主體として形成されたる實在に於ては、その全體に於ける總ての人々が個性存分に生かされ個々の人々はこの全體となつて働くことによつて自己の個性を盡す。このことによつて全の働きが個を通じて遺憾なく實現せられる。かくして全は總ての個を眞に生かし總ての個は全となつて働きそこにその實在の總力が發揮され行くのである。この具體的論理が更に國際世界に實現される時、世界に於ける總ての國々はその全體よりその個性存分に生かさ

1) 大家の論理については拙稿『大東亞戦争の世界史的意義—東亞新建設原理としての大家の論理—』(東亞人文學報第二卷第一號)並に『長期總力體制と「いへ」の論理』(經濟論叢昭和十六年十二月號)参照。

れ、各の國々は世界的全體となつて個性的能力を全體の爲めに發揮するに至るのである。即ち全體の働きは個々の國家の働を通じて實現せられ、この全體の働が個々の國家を個性存分に生かすのである。かくして世界全體の總力が發揮せられ、無限の發展が果げ得られるのである。然らば如何にしてこれが實現され得るであらうか。

「惟フニ萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンセシムルハ曠古ノ大業ニシテ前途甚ク遠遠ナリ爾臣民益々國體ノ觀念ヲ明微ニシ深ク謀リ遠ク慮リ協心戮力非常ノ時局ヲ克服シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼セヨ」との詔こそは、世界を大家おほやけとなす爲めに我々國民の正に踐むべき道を示し給ふた以下この道を考へる。

二

一つの論理が世界的に實現されんが爲めには既に見られたが如く、そこにこの論理を體現せる一國民がなければならぬ。これを大家の論理の世界的實現について云へば、大家の論理を以て自己の國家形成作用として居るところの國民がなければならぬ。この國民も他の諸國民と共に世界を形成して居るものである限り、世界の時代的論理によつて規定されて居るのである。而してその時代の形成原理をその時代の指導國民となるべきものの國家形成の原理即ち國體の論理が規定する限り、この國民の國體の論理がその時代の總ての國民の形成を規定するのである。この意味に於て近世に於ては英國が世界的指導國民となり、その國體の論理が時代的論理を成し總ての國民はこの英國の國體の論理によつて規定されて居たのである。然るにこの論理が行き詰まり而も來るべき時代の論理が明にされざる現代世界の變革期に於ては、自覺的なる國民は自己の國體の論理に返へりこれより自己を形成し直さざるを得なかつたのである。かくして英國は依然として個的多の國體の論理に止まつて世界資本主義體制を確保しその霸權を保持せんとし、ロシアは所謂無產者階級の獨裁によつて全一的論理を徹底し更に自

國を主體とする第三インターナショナルの世界秩序を實現せんとし、獨逸は全一的論理を以て個的多的論理を統制するところの全體主義的統制主義の立場に立つて獨逸民族世界制覇を實現せんと努力して居る。かく歐洲諸國が各自己を主體として世界を制覇せんとする現代に於ては、英米諸國も次第に統制主義に向はざるを得ない。

而も日本は容易に自らの國體の論理に歸ることが出來なかつた。即ち第一次歐洲大戰當時に至るまで最も深く英國の國體の論理に規定されてゐた日本は、大戰後世界資本主義體制の行き詰りと共にロシアの國體の論理を模倣せんとするものを一部に生じた。更に滿洲事變當時よりは獨逸の統制主義的論理の模倣が滔々として風を成すに至つたのである。今や大東亞戰に進み入り「億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ」との詔を拜し大御心に應へ奉らなければならぬ日本國民は、深く自己自身の國體の論理に歸らなければならぬのである。

國體の論理なるものは、その國家形成の原理である。故にその國家の發展を貫いて常に働いて居る形成力である。故にその國の歴史上に於ける一切はこの原理によつて形成されて居るのである。而もこの形成の原理は、日本國家形成發展の指導原理となつたところのものに於て最もよく現れて居るのである。日本の各時代の變革期に於てその最高指導原理となつたものは、その時々々の 天皇の詔であつた。故にこの變革期の詔に於て日本國家形成の原理が最もよく現れて居るのである。

この詔に一貫せる日本國家形成の論理を世界史的に哲學することが、日本哲學の課題である。即ちそこに於ては人類文化形成の本質的原理より日本國家形成の原理が諸民族の文化形成の原理との關係に於て研究され明にされるのである。日本の國家形成の原理が大家の論理にあることもかくて明確にされるのである。眞の日本文化なるものはこの日本國家形成の原理に基いて形成されたものでなければならぬ。而してこの論理に基いて日本の

經濟が、東亞の經濟が、更に世界の經濟が如何に形成さるべきかを明にするところのものが眞の意味に於ての日本經濟學である。これまでは日本の經濟を研究すればそれが日本經濟學であるが如くに考へられたのであるが、その論理が日本の國體の論理であらざる限りそれは未だ日本經濟學ではない。これと反對にその論理が日本の國體論理である限りそれが東亞を問題とするもまた世界を問題とするも日本經濟學である。これと同様に日本の國體の論理に基いて日本東亞並に世界の政治を如何に形成すべきかを明にすることが日本政治學の課題である。かくの如くにして「國體ノ觀念ヲ明徴ニシ深ク謀リ遠ク慮リ」との大御心に應へ奉り得るに至るのである。

かくの如き日本哲學並に日本科學を確立することが、日本の學界の世界史的な創造であつて、これによつて日本の國體の論理は日本の國民にとつてのみならず、世界の人々にとつて學問的眞理として論證せられ明となるのである。而してこれが世界のこれまでの如何なる論理よりも具體的な論理である以上、これが世界の總ての人々を承服せしむることとなるのである。

この日本國體の論理に基く哲學並に科學によつて爲さるゝ教育こそがはじめて眞の日本教育であり、この教育を通じてこれまでの抽象的な論理より眞に具體的な論理への轉換が各人に於て遂げられる。この日本人にしてはじめてこの大家の論理を世界に實現し得るのである。

三

世界を大家となすには、この大家を以て國家形成の原理として居る國民があつて、この國體の論理を十分に自覺し、この論理によつて一切を考へ得なければならぬのであるが、更にこの國民はこの國體の論理を世界に實現するに足るところの實力を有するものでなければならぬ。即ち大家を以て國家形成の論理としてゐる日本が

この國體の論理を世界に實現する實力を有するとき、これがはじめて大家の論理の世界的實踐主體である。

この力の第一は國民の和である。宣戰の詔にも「億兆一心國家ノ總力ヲ舉ケテ」と仰せられてあるがこの總力の幹根は人間の力である。人間の力は先づ人の和にある。これまでの日本には英米の資本主義の遵守者と獨逸の全體主義の模倣者とがあつて互に對立抗爭して居た。その最も露骨な表現は二・二六事件に於て見られる。かくの如く對立抗爭して居る日本は、その國家の總力を發揮し得ないこと云ふまでもない。この日本國民が億兆一心となる道は、「和衷戮力益々國體ノ精華ヲ發揮シ」との大御心を遵奉して、「上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ホシ下忠厚ノ俗ヲ以テ上ニ奉シ君民一體」と仰せられたる我國體の精華を益々發揮するより外ない。それは「天皇中心の大家」に生れ出て、その能力次第に啓發されたる國民の總てが、この大家となつて働き各自の能力を發揮し切ることである。かくて「天皇中心の大家」となつて働く總てのものは自ら一體とならざるを得ないのである。

かくの如く日本國民は先づその國體の論理に徹して億兆一心とならなければならぬのであるが、更にこの大和民族自體の大きさが問題となるのである。

アリストテレスは、その理想國家實現の素材因として人口國土の大きさを論ずるに當つて、「國家も亦個人と同じ様に爲すべき仕事を有して居る。而してその仕事を履行するに最もよく適當するところのものが十分なる大きさと考へらるべきものである」と云ふて居るが、日本のなすべきところのものは、世界を「いへ」となすことである。故にこの世界史的使命を遂行するに足る人口の大きさを有して居なければならぬ。

大東亞戰爭によつて日本が英米の支配を東亞より排除したりとするも、それで世界に恒久の平和が齎らされるのではない。日本が大東亞を「いへ」とし得たりとするも、地球上の他の部分に於ては依然部分的主體性の論理が

1) 前掲、拙稿、『長期總力體制と「いへ」の論理』參照
2) 拙著『精神科學的經濟學の基礎問題』第二一三頁參照

行はれて居るのである。それ等の國家は個人主義の論理に立つて世界の擄取者たる自己の地位を保持せんと努め、また全體主義の論理に立つて自己を世界の権力的支配者たらしめんと努めるであらう。東亞に對してもこれ等の國家はこの論理を以て臨むのである。日本はこれ等のものに對し東亞を衛るのみならず更に進んで世界を「いへ」としなければならぬのである。この日本はこれを爲すに足る十分の力を有してゐなければならぬ。自らにこの力を有せずして四億の支那大衆を恃むことも印度大衆を恃むことも出来ない。萬一日本が大東亞戰の次に來るべき戰に於て敗れるが如きことがあれば、今日の大東亞戰の勝利も結局水泡に歸せざるを得ない。然らば大東亞戰の眼目はむしろこの來るべき世界戰爭に勝ち貫くべき大東亞日本を確立することではなければならぬ。この點について一國の人口の有する意義を、世界史は我々に教へるのである。

優れた文化を有し勇敢であつたギリシヤ人もその民族が少數であつた爲めに、程なく滅びざるを得なかつた。今日その文化は残つて居るが、この文化を生んだ民族は、存續して居ないのである。然るに同じくこの時代に大文化を生んだ印度並に支那の民族は、その後幾多の苦難に遭遇しながら今日尙ほ存續して居るのである。これらの民族並に自然が、大であつたが故である。印度四億の民族は、過去數百年に亙る西歐民族の擄取をも押し除け、今や再びその獨立を回復せんとしつゝある。支那四億の民族も、今後依然大きな力として働き行くであらう。これと反對に西歐諸國はその自然人口が過少なる故に他の自然民族の上に立脚するに至りかゝつてその力を永く保持し得ないことが今や明にされつゝある。世界を「いへ」と爲すところの曠古の大業を爲さんとする現代日本は、必要なる環境を外に有する西歐型國家と内に有する東亞型國家との本質的な運命の對照より學ばなければならぬ。即ち日本も四億の人口を保たなければならぬ。而もこの日本は東亞十億の大衆の指導者となるのである。故

にそれ等の人々は優れたる健康と共に優れた精神的能力を有するものでなければならぬ。然らばこの爲めに適當な基地となるべきところのものがなければならぬ。それは日本人の精神的能力を數年にして低下せしむべき氣帯並に亞熱帶の土地ではあり得ないのである。然らばこの基地たるべきものは、大東亞に於て北半球の日滿支と南半球の濠洲並にニージーランドより外にあり得ない。ニージーランドはその緯度と地形に於て一層よく日本本土と似て居るのである。

我々は日本、滿洲、支那殊に北支に於て二億の日本人口を確保しなければならぬのであるが、更に濠洲、ニージーランドに於て二億の大和民族を確保しなければならぬ。かくて大東亞に於ける熱帶及び亞熱帶の諸地方がこの南北兩基地を結ぶ廻廊となる時、こゝに大家の論理の世界的實踐主體としての大東亞日本が、人的に自然的基礎に於て確立するのである。

今日濠洲、ニージーランドは英國の植民地として白人主義を確守し、米國、カナダと共に有色人種を排除して居るのである。この濠洲並にニージーランドが依然白人主義をとつて大東亞の中にある限り、英米はこゝを海空陸軍の基地として何時までも大東亞の擾亂を續けるであらう。かくの如くにして大東亞を防衛することは不可能である。日本は進んでこの白人主義を追放し、こゝに日本文化を移植し純粹に大家の論理に基いてこれを發展せしめ大和民族の文化並に人口基地を確立しなければならない。かく南北兩基地に於て大和民族の人口と文化との發展を計る爲めに大切なことは、どこまでも英米の個人主義的論理より脱却することである。

これまで日本の人口が十分に發展し得なかつたことはその自然の狭少なりしことにもよるのであるが、然し如何に自然が大となつても、これまでの如くに英米の個人主義的論理を金科玉條として居る限り人口並に文化の眞

の發展は有り得ない。即ち英米論理によつて形成されたこれまでの資本主義社會に於ては一切が個人を主體として考へられ行はれて居たのである。従つて衣食住の一切は個人により利潤を得て賣らるべきところの商品として生産されてゐたのである。衣食住のみならず醫藥も同様商品である。更に教育までが事實上商品として賣られて居たのである。人間が人間となるに必要なこれ等衣食住醫藥教育が商品として賣られる限りこれを購ふに足る金のないものは、眞に人間となり得ないのである。かくて「上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ホシ」と仰せられまた「天下億兆、人も其處を得ざる時は皆朕が罪なれば」と仰せられた偉大な國體の精華を有する我國に生れたところの陛下の赤子たる大多數のものが、人間としての能力を啓發し得ず、従つてその處を得て各自の能力を國家の爲めに最大に發揮し下忠厚の俗を以て上に奉じ奉ることも出来なかつたのである。かくの如くにして、日本國家の總力を眞に發揮すると云ふことが出来なかつたのである。即ちこれまでの如く個人主義的論理の支配して居る限り子供を人間ならしむるに必要なこれ等のものを確保し得ないから今日に見られるが如く結婚は遅れ産兒は制限されざるを得なかつたのである。かくして人口の増大を求めるとは不可能であつた。本來日本の國民生活の原理は、かくの如き個人主義的なものでなかつたことは、日本の國體が明確に確立した大化改新に於ける班田收授之法についても明にこれを見得るのである。そこに於ては氏族團體の對立抗争が否定せられ氏族團體の私有私用であつたところの土地人民が「天皇中心の大家」に歸して皇土皇民となり、この皇土が皇民の生活を確保すべく、男子は六歳より死に至るまで一人前の土地が給せられ女子はその三分の二が與へられ、死すればこれを國家に返還したのである。かくして各家の生活がその成員の數に従つて確保されたのである。それは個人々人を主體として居る英米論理による今日の個人主義社會とは全く異なり、「天皇中心の大家」を主體として「億兆の父母」たる

天皇が、赤子たる民にその生活を確保されたところのものである。この本來の「天皇中心の大家」を主體とするところの國家形成の原理に立ち返つてこれまでの英米論理を否定し、衣食住醫藥教育の一切をこの國體の論理を以て貫徹しなければならぬのである。かくして日本の國家に生れ出づる總ての者が、天皇の赤子として人間たるに必要な衣食住、醫藥、教育等を確保されるに至るならば、日本の人口は急速に増大し且つその總ての人々はその能力次第の教育を國家より與へられ、従つて人々の能力は最大に啓發せられ、その能力次第に處を得て總ての人々はその最大の能力を發揮して下忠厚の俗を以て上に奉ずることが出來、かくして國家の總力が年と共に益々大となり行くのである。このことはこれまでの狭小な日本の自然を以てしては不可能であつたが、今や確保されつゝある大東亞の自然はこのことを十分可能ならしめるのである。これにつけても速に爲すべきはこれまでの個人主義的な英米論理を、「天皇中心の大家」の論理に轉換することである。

今これを今日の事實について見るも日本は今や次第にその方向に進みつゝある。即ちこれまで全く自由商品であつたところの食物はその價格が公定せられ更に切符制度により國民生活に必要な分量が總ての國民に確保される方向に進みつゝある。勿論今日これを一層徹底しなければならぬ。例へば國民の保健上必要なものが尙ほ十分に切符制度を以て蓋はれず自由商品とされて居るものが少なくない。これらのものは速に切符制度の中に取り入れなければならぬ。更に切符を與へられても購買力なきものはこれを獲得し能はないと云ふことについても十分に考へられなければならない。例へばその人が孤兒又は未亡人でありその他正しき理由によつて必要品を購ふべき力を有せず従つて人間たるに必要な物も得られないと云ふことは、「天皇中心の大家」が國體であり従て總てが、天皇の赤子であるところの我國にては放任し得ざるところのものである。今日の衣料切符についてもこの

大家の論理が十分に徹底するを要する。住宅についてもまたこのことが云はれ得る。醫藥についても同様に大家の論理が徹底されなければならない。畏くも明治天皇は「無告ノ窮民ニシテ醫藥給セス天壽ヲ終フルコト能ハサルハ朕力最軫念シテ措カサル所ナリ」（施療濟世ニ就キ内閣總理大臣桂太郎ニ賜ヘリタル勅語明治四十四年二月十一日）との詔を賜はつたのである。故にこの大御心を遵奉し速にその實現に力を盡さなければならないのである。これが爲めには醫療國營等諸種の政策がこの方向に押し進められなければならない。

教育についても、また同様である。日本に生れた總てのものがその能力次第の學校に進み得、費用なきものに對しては國費をもつてこれを確保する時、はじめて總ての人々の能力は最大に啓發されるのである。「億兆の父母」たる 天皇が教育勅語におかせられて「國體ノ精華」を以て「教育ノ淵源」とせられ「學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ知能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ」と仰せられたところのものが徹底的に實現せられるのである。かくて教育が眞に國民の教育となるに至らねばならないのである。かくして總ての人々はその能力次第の處を得て大家となつて働き國家最大の力が發揮され得るのである。かくの如く衣食住、醫藥、教育等につきこれまでの個人主義論理の支配が否定され大家の論理が徹底する程、日本の眞の總力體制が確立し國家の總力が愈々發揮されるのである。それ故に日本の總力を發揮する根柢となるものは、英米の個人主義論理より日本本來の大家の論理への轉換である。従つて、眞の日本教育の内容となるものもここにある。即ちこの日本教育の中心をなすものは大家論理でなければならない。ことに南方基地に於ける教育についてはこの點に一層努力をしなければならぬ。英國もゼンブリツヂ、オクスフォードの優秀な卒業生を印度其他の植民地に送つたのである。然しその教育は個人主義論理に基いたものであつたが故にその結果は自國の物的利益の爲めに植民地を搾取するところのもとなつた。その

本國の自然は狭小でありながらかくして他を搾取することによつて高き物的生活に習慣づけられたる英國人は、個人主義論理に基いてこれ等植民地を搾取するより外に行くべき途はあり得なかつたのである。かく搾取される植民地は印度に於て見られたが如く、幾度か反逆の歴史を繰り返へした。英國の國運が旺盛なる限りこれを彈壓し得たが、今や一度國運の傾くや印度、エジプト、西亞の諸國は學をかへすが如くにその能度を變へつゝある。かくして三百年の英國の世界制覇の歴史も今や終らんとしてゐるのである。日本はこの點についても英國より多くを學び得るのである。先づ少數民族が、多數民族を搾取して立つことの無力さを、學ばなければならぬ。日本は南北兩基地に四億の大和民族を確保し自ら大地に根深く立つことを要するのであるが、この大和民族は決して奢侈に陥り個的多の論理に立つて他を搾取するものであつてはならないと共にまた全體的一の論理に立つて他を權力的に制覇するものであつてはならない。大和民族はどこまでも大家おほやけの論理に徹して大東亞に於ける總ての民族をしてその所を得しめ兆民をして悉く其堵に安んぜしめるものでなければならぬ。即ちそれ等の人々に對しても人間たるに必要な衣食住、醫藥、教育を與へなければならぬ。これまで自國內の權力者に壓制され白人に搾取されて來た東亞の人々は、この大家の論理に基く日本の働きによつてはじめて人間としての生活を保證されるのである。故にこの東亞の總ての人々は、この日本に心より感謝しこの「日本を中心とする東亞の大家」となつて働きの大家の爲めにその能力並に資源を致すに至るのである。かくしてはじめて大東亞の總力が發揮されるのである。こゝに大東亞は不壞な一體となり如何なる敵に對することも出來るところの總力體制として確立されるのである。

かゝる東亞の大家が確立せんが爲めの基礎はどこまでも日本人自體がその根本に於て大家の論理へ徹底すると

云ふことより外にないのである。これまでの日本人は資本主義體制なる英國の國體の論理によつて形成されたる實在に於てこの論理によつて作られて自己の國體の論理を忘れ、一切を個人主義的に考へ又は獨逸の國體の全體主義的論理に心酔し全體主義的に考へるものが少なくなかつたのである。かくの如き状態で大東亞戰爭を戦ふのでは、東亞を搾取する個人主義的體制か、權力的に制覇する全體主義體制が、結果するにすぎない。若しかくの如き東亞であれば、それは再び倒れざるを得ないのである。故に眞に確乎不動の東亞を實現せんとせば、各人に於てこれまでの個人主義的論理並に全體主義的論理より大家の論理への徹底的な轉換がなされて居なければならぬ。これが大東亞日本の教育の骨子である。

この眞教育の骨子が日本の國家形成の論理を世界史的に哲學し科學するところの日本學にあることは前述せしところである。この眞の日本教育を受けたる日本人にしてはじめて、「協心戮力非常ノ時局ヲ克服シ」との大御心に應へ奉つて日本を大家となし東亞を大家となし、世界を大家となすことが出来るのである。かくしてこゝに最も具體的な論理に基づくところの具體的な文化が創造されることとなるのである。

四

かくの如く日本を中心として大家の論理に基いた哲學科學が創造され、それが實現としての具體的な諸文化域が實現しかくて人間の生活が具體化され行くと云ふことは、世界史に於ける驚異的な創造である。即ちこれまでの世界に於ける形成の原理は、この大家の論理に比すれば何れも抽象的なものであつた。従つてこれまでの文化はこの大家の論理によつて創造されたる文化に比すれば、より抽象的である。従つてその生活もこれを大家の論理に基く人間生活に比すれば、抽象的なものにすぎないのである。即ちこの大東亞に於ては前述せし如く總ての

民族が各々その處を得しめられてその能力次第に大東亞全體の働を分擔してこれを遂行し、この働によつて東亞全體が衛られ兆民が衣食住・醫藥・教育を得てその堵に安んじ、そこに東亞の文化が創造され發展し行くのである。この東亞が實現され行く時、他の抽象的論理に基くより抽象的な生に置かれて居る世界の國々の大衆は、この具體的な大東亞に心を引かれざるを得ない。従つてまたこれが原理としての日本の哲學科學を救済の聖典として尊重せざるを得ない。故にこれ等の國々の支配者達がその國家を保持せんとする以上、この大衆の具體的な要求に従ひ自己の抽象的な論理を大家の論理に轉換しそこに於てある總ての個を生かし總ての個がその全體となつて働くところの最も具體的な論理の實現に努力せざるを得ない。その結果これ等の國も世界の大家の成員となるに至るのである。この道を進みゆく時これまでの世界に於ける抽象的論理の對立は止揚され従つて抽象的論理に基いた戰爭なるものが止揚されるのである。若しその爲政者が大衆の意向を無視して、自己の利益の爲めに、あくまでその部分的主體性の論理に止まらんとするならば、大衆は遂にこの爲政者に對して反抗して立つべきことは、中世より近世への轉換期に於て見られたと同様である。

以上に於て明にされたるが如く、これまでの世界は部分的主體性の抽象的な論理を形成原理として居たが故にそこには無限の鬭争が繰り返へされたのである。然るにこれに代つて日本の國家形成の原理である大家オホミヤの論理が徹底され行くに従つてそこに「萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンセシム」と仰せられたる眞の人生が實現され行くのである。かくて「天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼セヨ」との大御心に應へ奉ることが出来るのである。

大東亞戰爭なるものはこの戦なき世界を實現する爲めの世界的實踐主體たる大東亞日本を確立す聖戰である。